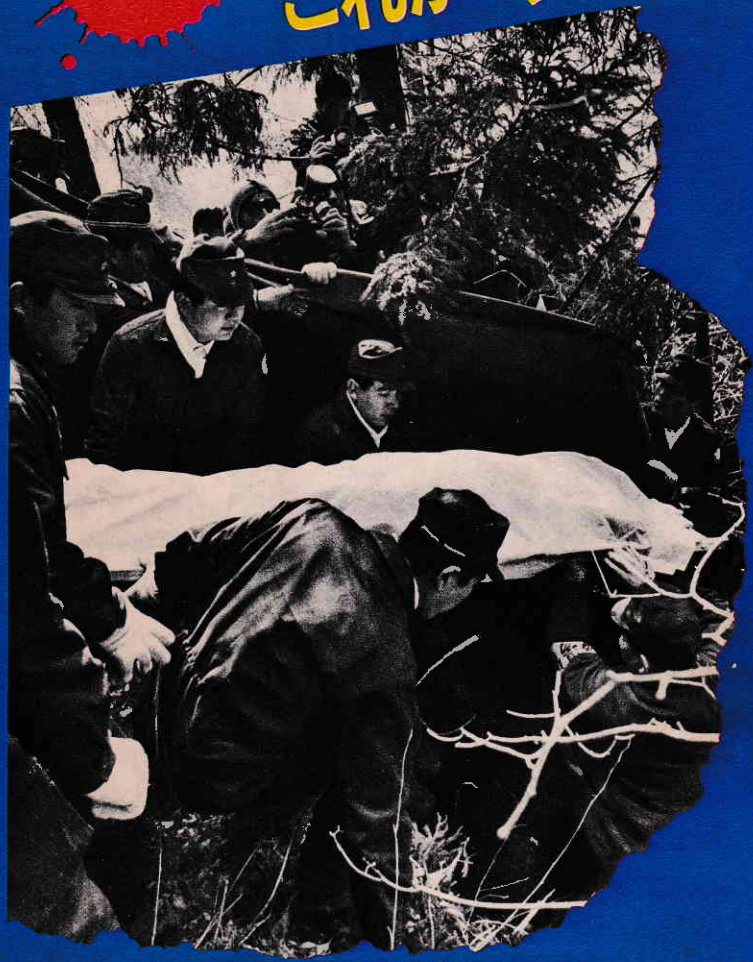
週刊朝日 3-24

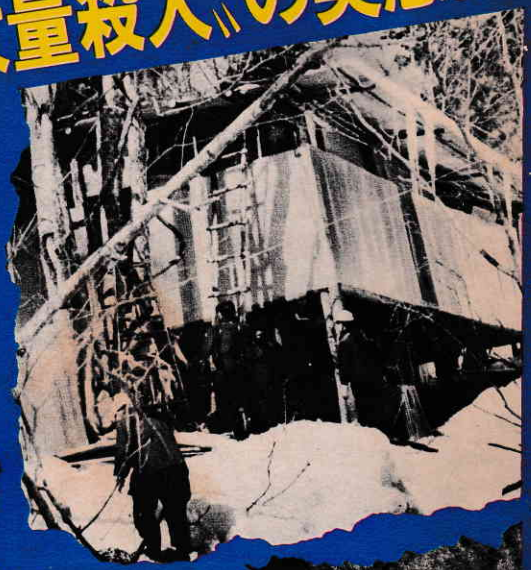
1972 90円

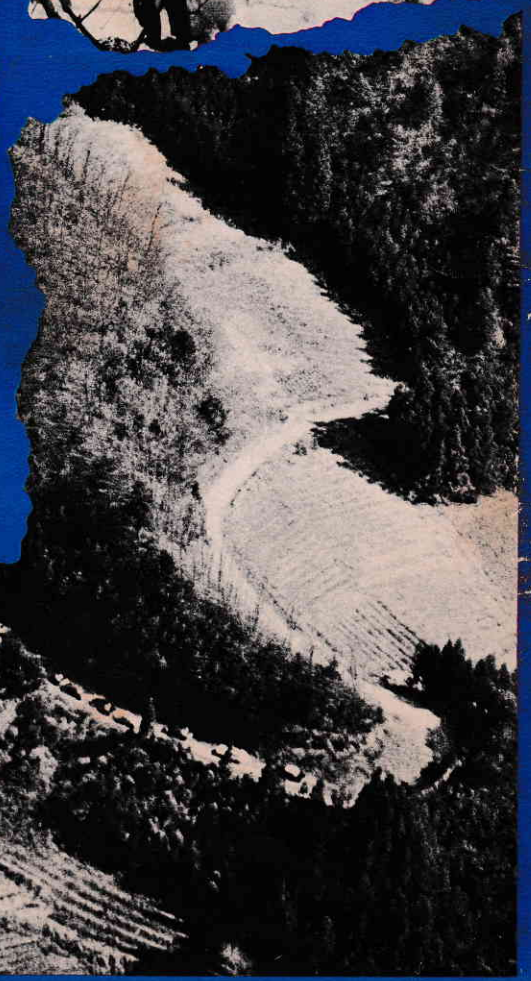
特報

「連合赤軍」事件

これが〝リンチ大量殺人〟の実態だ







連合赤軍大量リンチ事件

鬼気せまる惨殺の墓場

連合赤軍リンチ殺人の犠牲者のうち、山本順一と大槻節子が埋められていた群馬県利根郡白沢村高平小芝地区の現場。沼田市街地から約10キロ離れた杉林の中だった。2人の遺体は全裸で、かい違いに置かれていた（10日）

《本文参照》

撮影・本社写真部、出版写真部

東銀で——
レッツ・ゴー！

ナイス・ペース…マイ・ライフ！
東銀の債券貯蓄〈ワリトー〉〈リットー〉は、新時代をのりきる最も有利な貯蓄作戦です。

ワリトー 割引東京銀行債券

1年貯蓄で最高利回りの決め球

- 利回り年6.213%・無記名
- 税金は8%だけ、源泉分離課税です
- ムダなくふえる**ワリトー増額自動乗換口**をおすすめします

リットー 利付東京銀行債券

東銀だけの3年貯蓄最高利回り

- 利回り年7%・無記名
- ㊥マルユー制度のご利用をおすすめします

世界を結ぶ——
東京銀行
国内33 海外110・海外コルレス網4000余

本店　東京都中央区日本橋本石町1－6－3
Tel. 東京(03)270－8111　〒103－91
お取扱い店舗　本店営業部　日本橋　銀座　八重洲通　人形町　神田　丸ノ内　有楽町　日比谷　内幸町　赤坂　新橋　浅草　新宿　溝田　羽田　横浜　清水　名古屋　名古屋駅前　名古屋東　大阪　船場　心斎橋　大阪空港　神戸　トーアロード　広島　下関　福岡　長崎　札幌

妊娠八カ月だったという金子みちよの遺体発掘作業を遠くから見守る現場近くの農家の主婦たち　事件のあまりのむごたらしさに表情をひきつらせていた（10日・利根郡白沢村高平黒岩地区の山林で）

榛名山西南斜面の山林に埋められていた山崎順の遺体を発掘する群馬県警の機動隊員　他の犠牲者と同じように〝墓地〟は暗い杉林の中だった（11日・群馬郡倉淵村水沼中尾十二塚で）

テント張りの急造「解剖室」（右奥）で検視ののち　火葬場へ運ばれていく山崎順の遺体
連合赤軍の人民裁判で〝死刑〟を宣告された山崎の遺体には　首をしめられた跡や心臓に達するほどの刺し傷など全身にすさまじい外傷があって　リンチのものすごさを物語っていた

山崎の遺体が発掘されている間
現場の杉林から少しはなれたところで待機している報道陣

キングセイコー
クロノメーター

優秀級クロノメーター規格にみごとパスした、キングセイコー。

クロノメーター規格とは、国際検定基準にもとづいて行なわれる精度テスト。いわば、腕時計の狭き門です。その〈優秀級〉に、キングセイコーはみごと合格しました。文字板にしるされたタイトルが、この腕時計に秘められた大きな実力を物語っています。持つ人の誇りと信頼にこたえるステイタス・シンボル。いちど手にした人は、誰もがうなずきます。

"なるほど、キングセイコー……"と。

●安定した精度〈高振動ハイビート〉●〈防水〉●秒まで合わせられる〈セコンド・セッティング装置〉つき

キングセイコー優秀級クロノメーター…20,000円より

キングセイコー……15,000円より

札幌オリンピック公式計時 SEIKO　株式会社 服部時計店 本社・東京

山崎順の無残な遺体には　検視に当った群馬大医学部と群馬県警鑑識課のグループも思わず息をのんだ

衝撃の総括「連合赤軍」事件

リンチ大量殺人の実態だ

連合赤軍のリンチ殺人事件から受けたショックを、どう表現してもむなしいような気がする。それほど、国民に与えた衝撃は大きかった。しかし、といって、私たちと無縁な事件とも考えられない。私たち自身に、息子に、娘に、友人に、どこかでつながってくる問題なのだ。三島由紀夫の割腹、横井庄一さんの28年の忍耐、そして、この連合赤軍事件――日本人とは何かを解く、これほど格好な材料はない。この事件の全貌を、ここに再現したゆえんである。

静まりかえる杉林の中で、四人の遺体を発掘する人々（十二日）

プロローグ

地蔵峠の雪

元小学校教員の加藤益男さん(五二)が、発掘現場に顔を見せたのは、十二日の正午をすぎていた。

「確認を」という群馬県警本部員の声にうながされて、よろけるように坂を登った。現場は、群馬県群馬郡倉淵村の杉林のそば。地蔵峠に向うまがりくねった県道から、二百㍍離れた山麓だ。

益男さんの手には、ジュズがしっかりとにぎられていた。二人の息子を淺間山荘で逮捕され、いまは長男の能敬(三)が、変り果てた姿で土の中に埋まっている。

益男さんは、歩きながら何度もつまずいた。メガネが鼻先までたれ下がっている。

記者団の質問にもほとんど答えず、「申上げることはございません」とポツリ。ミゾレまじりの雪が、益男さんのコートを静かに打っていた。

第一章　山岳結集へ

山本順一(三)の名古屋のアパートの電話が鳴ったのは、昨年十二月一日ごろだった。電話の相手がだれかは、妻・保子(三)にはわからない。受話器を置いた山本は、臨月の妻を残したまま、ポイと家を出た。そして、半月ほどたつとヒョイと帰ってきて、

「群馬の大久保事件の犠牲者の墓のそばだが、お前も頼良も一緒に住めるところがあるから、行こうよ」

と、保子を誘った。頼良ちゃんというのは、山本が留守の間に生れた、かれら夫婦の最初の女児だった。アラブ・ゲリラの"ハイジャックの女王"ライラ・カリドの名前にあやかってつけたものだ。

ともに中京安保共闘の活動家だったが、山本は保子に「群馬の家」について詳しくは話さなかった。頼良ちゃんを連れた保子は、十二月二十七日、東京・浜松町の喫茶店で山本と落合い、モテルで一泊したあと、群馬に向った。保子は「大久保事件のあったところは山の中なのに、そんなところに家があるのか、と不審に思った」と自首後に自供しているが、

「親子三人そろって暮せるなら」

と、山本のあとにしたがった。

榛名山麓の山岳アジトは、榛名湖畔から北東約五㌔のところにあるが、すでに雪におおわれていた。これが「三人の住む家」と知って保子はびっくりしたが、もっと彼女をおどろかせたのは、そこに、"安保グループ"、"赤軍グループ"の幹部や活動家が十四、五人顔をそろえていたことだった。

この山岳集結の状況について、三月十一日、東京・練馬署に自首した京浜安保共闘の元工員、前沢虎義(三四)が、こう自供している。

「昨年十一月末ごろ、永田洋子、坂口弘、吉野雅邦ら京浜安保共闘と中京安保共闘の仲間十二、三人と榛名山に行って、温泉場の跡のようなところにアジトの小屋をつくった。そのあと、赤軍派の森恒夫、山田孝らが合流、つづいて、生れたばかりの子どもを連れた山本順一・保子夫妻がやってきた」

"資金"と"武器"が結合した地下軍団

こうして"安保グループ"と"赤軍グループ"の実質的ドッキングが行われたのが十二月二十日のことだった。この日の合同会議で、「連合赤軍」の最高意思決定機関、中央委員会七人のメンバーが決った。委員長は森恒夫(三三)、副委員長は永田洋子(三三)、そして書記長に坂口弘(三三)。中央委員(CCと略称していた)に吉野雅邦(三三)、坂東国男(三四)、寺岡恒一(三四)、山田孝(三七)が選出された。

こうして「資金」をもつ赤軍派と「武器」を確保している安保共闘が合体し、具体的な地下軍団をもつことになったのだが、それにしても、何が彼らを山岳アジトへとかりたてたのか。

ひとつは、警察当局のアパート・ローラー作戦に追立てられ、山へ逃げるしか道が残されていなかったこと。石井功子、川島陽子ら京浜安保共闘の"大物"が逮捕されたのも、この作戦の"成果"だった。

また、連合赤軍の地下軍団にとっては、安全な爆弾製造工場、射撃の訓練場が欲しかった。事実、妙義山アジトで押収された遺留品の中には、爆弾製造のための鉄パイプ、導火線、黒色火薬が見つかっているし、榛名山アジト近くの立木には、ライフルを実射したらしい跡が残っていた。

イデオロギーの面からいっても、とくに毛沢東主義を信奉する"安保グループ"には、「長征」気取りで、山を転々とすることへのあこがれがあったともみられている。最初に榛名山アジトに入ったのが"安保グループ"であったことは、そのことを意味しているのかもしれない。

「しかし、もっと重要なことは」と、連合赤軍の孤立化を強調するのは、治安当局のある幹部だ。

「京浜安保共闘が長岡市で強奪した銃を使って、赤軍派が、米子市の銀行を襲ったことについて、赤軍内部から『人民の財産を奪った』と批判が出た。さらに世界同時革命を唱える赤軍派と、一国革命を主張する京浜安保共闘が連合したことについても、単なる野合にすぎない、と仲間からきめつけられた。

人民からも、仲間からも見放された彼らは、孤立する中で、山へ逃がれ、自暴自棄の〝乱殺パーティー〟になり下がっていくしかなかった。武闘派とか理論派とかいう見方自体、連中を過大評価していることになる」

もしそうだとすると、「M」（資金）と「B」（武器）の合体のあとに計画されていたらしい「P」作戦（要人誘拐）も、〝幻の革命〟のなかの拡大された〝黒い部分〟であった。

山本順一・保子夫妻が榛名山アジトに着いたとき、すでに森、永田を頂点とする〝七人委員会〟の手でリンチが始っていたのだ。

第三幕 リンチの裏側

三月十一日、山崎順（三）の遺体が発掘された。榛名山関係の八遺体のうち、最初のものである。現場は杉林の中。木もれ日が、ちょうどスポットライトのように〝墓場〟にさしこんでいた。

午前十時十分発掘完了。十時四十六分検証完了。現場にきた父親（五六）はただ「よくわからないが非常に似ている」とだけもらした。

持木群馬県警捜査一課長のメモは――。

「遺体は腐乱ひどし。表皮全面はく脱。臭い強し。左顔面うっ血。首に幅一・四㌢の二筋の傷。特に左けい部に顕著。

左胸部、即ち心臓部に三カ所の刺創。幅二・六㌢、四㌢、一・八㌢。犯人の供述は処刑、その結果である。

左右両手首に緊縛の跡あり。左足首も同様。陰のうに内出血あり」

首、心臓、陰のう……それらの部位にくりかえし与えられた〝憎しみの手〟。

山崎の処刑は、「アジトに出入りしていた女性をめぐって他の男とトラブルを起し、森、永田らにとがめられて嫌気がさし、逃げ出そうとしたところを捕まった」もの。「男女関係」と「脱走」である。

彼らはリンチを「総括」と呼んだ。自供によれば、それはブルジョア社会の残存物を排泄して革命戦士になることだ。討論の過程で総括し尽せないときは、暴力で援助し、それが死に至ったときは彼の敗北となる、という。だが結果的に「総括」は死であった。

「処刑」は裏切分子に対して宣告するもの。山崎順と寺岡恒一（二四）の二人が処刑該当者である。

三月十二日、四体が発掘された。その中でいちばん遺体が痛んでいたのは進藤隆三郎（三）である。凍死ではない。

「肝臓内出血、腹腔内出血」。左肋骨六本が折れ、肝臓は破裂していた。

「女遊びをして革命への実践がみられなかった」

というのが処分の理由だが、遺体の痛み方と男女関係の強い連鎖がここにも顔を出している。

迦葉山アジトで、山本保子の夫、順一が殺されたのは二月初旬と推定される。運転免許証をもつ順一は、榛名山で殺された犠牲者のほとんどを車で〝墓場〟に運んだ。処刑の理由は「運転にミスが多かった。二日間の予定の東京レポに一週間もかけた。榛名から迦葉への移動のとき、妻保子がオシメを荷作りするのを手伝うなど、〝亭主的〟で革命兵士的でない」というものだった。

まず世俗の関係をすべて解体する

両手両足を縛られ、雪の中に放り出された順一が、数日後、ついにサルグツワをかまされたまま、オーオーと泣きながら息絶えたのを保子は見た。

永田はリンチの際、直接手を下さなかった。背後に控えて罪状を絶叫し、呪術的な残酷な儀式を白熱化していった。永田の目標は、夫婦も愛人も兄弟も、それら世俗の関係をすべて解体し、その上に革命への〝純化の道〟を築くことであった。

〝純化の道〟をいささかでも汚すもの、それは絶対に許せない。

三月十二日に発掘された四遺体の一人、尾崎充男の総括理由「寝袋に入ったままチリ紙をとってくれと甘えた」も、その意味で、許せないものだった。こうした雰囲気の中で、ただ一人、無心の笑顔をみせる「頼良ちゃん」がこの集団のマスコットとなったことは、十分にあり得たろう。また、頼良ちゃんの泣声が彼らの神経を逆なでしたことも。

●レジャーのおともに ワンカップ大関
1級 180㎖ 110円
SAKE One CUP OZEKI 大関

だが、なぜ彼らは、そのような厳しい「総括」への道をたどらねばならなかったか。

森の自供によると、昨年十二月連合赤軍の活動についていけない脱落者が二人でて、その時は金を与えて帰してやった。しかし、その後、警察に寝返りをうたれればアジトに足がつくと気がついた。それが心配で、以後「総括」を始めたのだ、という。

CC幹部は理論面でというより読を握り、ナイフを持つ武装力で指導していた。抵抗はその点でもむずかしかったといえそうだ。脱走したのは、女二人と、元工員の前沢虎義である。少なくとも前沢には生の生活体験がある。〝幻の理論〟にどうしてもついていけないものがあった。それを実行にうつす力があった。しかし他の男たちは永田の〝理論〟に身体ごと屈服し、ついに脱出にふみきれなかった。

だから後閑山荘で逮捕されたもののうち何人かは、命拾いしたともいえる。また、なぜ、かれらが山荘であれだけ抵抗したかのナゾも解けてくる。〝日和った〟あとの「総括」がこわかったのか。

切裂かれた山田の着衣に、捜査員が疑問をもったことから、大量のリンチ殺人は明るみに出たのだったが、それにしても、加害者森・永田らと、被害者山田・山本らを分けたものは何だったのか。

無事に保護された山本頼良ちゃん
（13日午後10時，千葉県・市川署で）

第三幕 生と死を分けたもの

ここに一通の「上申書」がある。たて書きのきれいな筆跡で、最後に森恒夫と署名がはいり、指印が押されてある。

森がこの上申書を書いたのは、妙義山中から山田孝の死体が最初に見つかった三月七日の翌日、つまり八日の夜のことだった。三、四日前から、捜査官にペンと紙を要求しており、十五分ぐらいで一気に書きあげた。その一部を紹介してみよう。

【上申書】

一、二、略。

三、日本階級闘争の中で、かつてない熾烈な権力との攻防を通じて、われわれがかちとろうとし、その端緒についた革命戦争の党建設――その内実としての「共産主義化」の闘いは敵権力に対する銃を軸とした殲滅戦以前に、われわれ自身に死にもの狂いの闘争を要求していった。この闘いの中での彼等の死は決して反革命や個人の卑俗な人間性の問題として片付けられるものではなく、文字通り生死を賭けた革命戦争の主体構築の闘いの中に刻み込まれなければならない。

四、今は逮捕された同志の団結を軸に、この十二名の同志の死を決して無駄にせず、それを革命戦争の党建設へ止揚する闘いを、われわれはより根底的に進める段階に到達している。その事の確認の上に、私はこの十二名の同志たちのなきがらをその家族の人たちにできる限り早く手渡すための手続きを上申します。

前橋地方裁判所殿

森は、山田の死体が見つかってから、元気をなくし、食事ものどを通らない。毅然たる永田と、いらいらする森。森恒夫とは、どういう男なのだろうか。

病気で情緒が乱れていた？ 永田

父親（五六）は大阪市役所交通局の公務員で、現在は定年退職して外郭団体に勤めている。

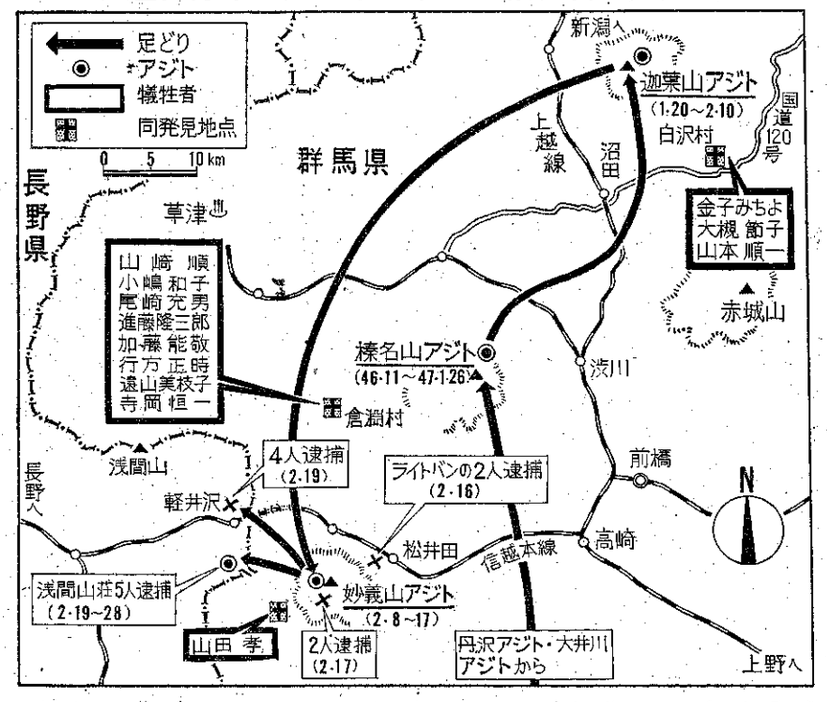
森は大阪市立豊崎中学から府立北野高校へ進んだ。北野高校といえば、東京の日比谷高校に匹敵する有名な進学校。中学時代の成績はクラスの最上位だった。

高校時代は、中ぐらい。無口で、目立たない生徒だった。剣道部に属し、二年生のときからキャプテンをつとめ、卒業時には二段。どちらかというと層で風をきって歩く右翼的な生徒だったという。

「一年浪人すれば、京都大学も可能だった」（英語の先生の話）という成績だったが、現役で大阪市立大文学部へ進んだ。

在学中は、共産同（ブント）関西派として活躍、四十四年九月赤軍派が結成されると政治局員になった。「よど号」ハイジャックで北朝鮮へ行った田宮高麿とは、大学時代に知合い、同じ下宿に住ん

連合赤軍の足どりとリンチ犠牲者の発見場所



でいたこともある。

高校時代の恩師は、「思想的に筋金入りとは思えない。だれかの影響を受けて、次第に後に引けない形となったのではないか」と首をかしげるのだ。

その〝だれか〟は、まず塩見孝也赤軍派議長だったろうし、田宮だったろう。そして次第に幹部は逮捕され、国外に去った。そして永田洋子は森にとって、おそらく何人目かの〝だれか〟だったのではなかろうか。

その永田は、私立の女子高校から共立薬科大学を卒業した薬剤師。京浜安保共闘の最高幹部・坂口弘と同棲していた。

永田は、パセドウ氏病に悩み、症状はかなり進行していたのではないかといわれている。この病気は、悪化するにつれ情緒が乱れ、躁とうつの起伏が激しくなってくる。さらに、女性としてあまり美人でないという劣等感と嫉妬心が激しいリンチにかわったという見方もある。

死線をさまようリンチの対象者を冷たくながめながら、「お腹の子を出せ」とか「死ぬまでは考えられない言辞がとびだすのも、あるいはこの病気のせいだったのかもしれない。

この森、永田一派が資金と武器を支配し、指導者イコール殺人者として生残る一方で、虫ケラのごとく扱われた仲間もいたわけである。

たとえば、リンチの最後の犠牲者となった中央委員、山田孝は、銃と爆弾をかざして武装蜂起に突走ろうとする森、永田ら〝武闘派〟に対して、軍の組織立て直しが先決、蜂起は時期尚早とする〝穏健派〟の立場にあった、とみられている。

山田は三十八年春、下関市の下関西高を卒業、一浪して京大法学部に進んだ。高校時代の山田は、三年のときクラス担任だった下田衛先生(会)が、

「勉強がよくでき、素直で地味なほんとうにいい生徒だった」

と、目に涙をうかべながら回想するほどの〝模範的〟な生徒だった。この点は浅間山荘にたてこもった吉野雅邦、坂口弘、坂東国男、それに〝リンチの女王〟永田洋子の場合と奇妙に似ている。

奇妙に多い「中学、高校時代は模範生」

だが、大学にはいってからの軌跡は、永田らとは違っていた。永田らの活動家としての派手な経歴にくらべ、山田のそれは高校時代のように地味だった。

活動家としての山田を知る、ある元京大生は、

「アジ演説はへただった。彼が赤軍派に加わったのは大菩薩峠事件(四十四年十一月)の直前で、赤軍派内での彼の役割は、軍の財政をきり回すようなことだった」

という。事実、山田の〝赤軍兵士〟としての〝実績〟は、これといって目立ったものはない。四十五年五月、塩見赤軍派議長をかくまった疑いで逮捕されたが、証拠不十分で不起訴。わずかに〝兵士〟らしい片リンをみせたのは、四十四年五月に京都市内の出版社での従業員解雇問題に首を突込み、出版社の役員に、

「刺し殺したろか」

と、ののしりながら殴って逮捕され、京都地裁で罰金二万円、執行猶予二年の判決を受けたぐらいだ。

山田は裁判で保釈中に結婚し、一時行方をくらましたため保釈取消しとなり、京都拘置所に収監された。その際、山田は拘置所の中で、「妻が妊娠しているので、再保釈してくれ」

と、訴えるなど、森らにいわせればおよそ〝反革命的〟な言動をみせている。山田は森らと違う〝肌あい〟をもっていたようだが、こんな点から、山田を〝理論派〟とする見方が出てきたのかもしれない。

だが、山田の裁判を知る関係者の一人は、

「理論派などとは、とんでもない。法廷では一応、左翼用語を使って主張するが、その論旨は宙に浮いている感じだった。ときには弁護士に助けられながら、論旨のつじつまを合わせているようなところさえあった」

と、山田の〝理論派〟としてのもろさを指摘している。

京都地裁での結審の日、山田は白ワイシャツにネクタイという、森らのいう〝ブルジョア・スタイル〟で出廷、人目をひいた。

「靴をみがき、髪を整え、爪を切り、ひげは必ずそり、清潔なズボン、ワイシャツを使用すること」(連合赤軍と体質が似ている過激派の服務規律第四章)——山田は、果してこの規律を実践しようとしたのか、反革命兵士に堕落したのか。このへんの〝差〟が、山田の運命を分けたのだろうか。

また、頼良ちゃんの父親・山本順一は、愛知県立岡崎北高から北九州大学中国語科へ進み、卒業後は名古屋市の日中友好商社「華潤」に就職している。

「仕事や青年交流で、中国に三回も行って、毛主義の現実に対する理解も深かった。慎重な男でしたから、森らの〝唯銃主義〟には初めからついて行けるはずがないのに、彼はなぜ会社をやめ、山岳アジトに向って、こんな目に会ったのですかねえ」

と、日中貿易の関係者もいぶかるのである。

かつては同じ仲間だったのに、なぜ生者と死者に別れてしまったのか。そこに、より過激な路線が支配し、やがて自滅していく若い過激派の運命を感じるのである。

「リンチの命令は森と永田が出していたようだが、二人は、『恋愛はブルジョア的だ』とみていたらしいね」

十一日夕方、ある捜査官が、その日の発掘状況を発表したあと、ふとこぼしたものだ。すかさず報道陣から、

「では、〝交渉〟といったようなことは?」

という質問がとんだ。別の捜査官が、これを受けて、

「たとえ夫婦の間柄でも、アジト内では、セックスはもちろん夫婦らしい素振りを見せることも法度だったのでは……」

と、つぶやくように答えた。

都市アジトでの、かれらの男女関係がどうであったかは、まだはっきりしない。しかし、原始共産社会にも似た山岳アジトでの生活は、この捜査官の話からもうかがえるように、〝禁欲主義〟の掟に支配されていた公算が強い。

地下軍団の実質的な合体が昨年暮れという連合赤軍には、まだ明文化された規律はない。しかし、さきに触れた、ある過激派の服務規律を、森、永田らの幹部たちが読み、独自の規律をつくるための〝草案〟として使っていたらしい、と公安当局はみている。

第四幕 血ぬられた規律

この服務規律は、タテ二十㌢、ヨコ十五㌢ほどのもので、総則に始り、党生活、住居、衛生、行動、処罰など、三節十六章からなっている。どの個所にも、ゲリラ戦士としての行動に対する「注意」と「規制」がザラ紙約二十枚にめんめんと書かれている。

「規約に反すると死の処置を受ける」

この服務規律は、まず「政治警察に対し攻撃的に組織を防衛する」などの三大規律に始り、「党は自立した革命家の集団である」「党決定、規約に違反した場合、最高死に至る処置を受ける」などの六大原則に続く。以下、いくつ

ここにも伊奈製陶が活躍する——
施工が簡単な一人浴そう——
二方エプロンタイプ

PB-459B

なめらかな肌ざわり、耐久性にすぐれたF.R.P製……ポリバスに必要な高度な品質に加えて、四方どの方向からでも釜の取りつけができるという〝施工のしやすさ〟が特長です。ご用命の節は〝ポリーナ二方エプロン付〟とご指定ください。

●業界のトップ●

ina ポリーナ

伊奈製陶株式会社
本社　愛知県常滑市 〒479

かを抜すいすると――。

家族、財政は党に一元化されること。

住居は二階を選び、ドアは強固なものを使用し、脱出経路をあらかじめ用意する。

特別の党務がない場合、早寝早起を厳守する。

喫茶店を使用する場合は、住居より少なくとも電停、国電、地下鉄、私鉄にして二駅以上離れること。

言葉使いに注意し、外では無駄話をしない。特に関西弁、左翼用語（消耗、ナンセンス、etc）は使用しない。

敵と闘う頑強な肉体を維持、創ることが成功の第一の義務である。三カ月に一回の定期健康診断を組織的に行う。

よく走り、よく運動せよ。

散髪は月一回（長髪禁止）入浴は週二度以上、洗たくは週二回以上、下着の洗たくはひんぱんに励行せよ。

電話番号は、全部暗記しておき、メモ等決してしないこと。記憶外のTELは局調べか電話帳にまかせ、電話メモ等持たないこと。

――この服務規律について、ある公安関係者は、こう推定する。

「幹部クラスの逮捕者を相次いで出したとき、ゲリラ活動そのものが崩壊の危機にさらされる。それを守るために規律が必要だったし、また、あとから闘争に加わったメンバーが、幹部の方針と異質の行動を起すことのないよう、きびしい規律でしめ上げる必要もあったのではないか」

この厳しい規律の存在は、山本保子の自供からもうかがえる。

「親子三人一緒に暮せるなら」という保子の人間的な〝期待〟は、榛名山アジトで、あえなく消えた。いきなり永田ら幹部から「子どもを連れてきていいとは、いわなかった。なぜ連れてきた」と批判され、親子三人バラバラにされた。

頼良ちゃんは看護婦志望の中村愛子に渡され、母乳を飲ませることすら禁止された。肉親の情を断ちきることが革命戦士の第一の条件であり、母乳を与えるなどは「とんでもない反革命的行為である」とみられたからだ。

それからというもの、頼良ちゃんは、中村の手で粉ミルクで育てられるようになり、保子の母乳はリンチの恐怖もあって間もなく出なくなった。もちろん夫の順一との〝交渉〟は許されるはずがなく、夫婦らしい会話もできなかった。

それでも、迦葉山アジトでは一度だけ夫婦らしい〝対話〟があった。保子は、こう自供している。

「一月下旬、アジトの近くの川にオムツの洗たくに行くと、夫が茶碗を洗っていた。そのころ、私の顔が疲れてむくんでいたが、夫は『太ったねえ』と言葉をかけてくれた」

狭い山岳アジトのなかで、すさまじい〝隔離政策〟がとられていたのだろう。順一は、それから数日後、リンチで死んでいった。

同じようなことは、中央委員の吉野雅邦と、愛人の金子みちよとの間にもあったらしく、妊娠八カ月の金子のリンチに吉野も加わり「総括されるのが当然だ」と、吉野はうそぶいている。

こうみてくると、「態度が亭主的で反革命的」「男女関係の乱れ」という変な「総括」「処刑」の理由も、彼らにとっては、決してふざけた思いつきの〝判決〟ではなかったかもしれない。

実際、零下一五度という極寒の中で、食事も粗末、フロにも入れず、つねに捜査当局の目を恐れ……ということになれば、隊の統制を守るために、異常でバカげた規律が必要になったらしい。

これは、先にもふれたように、〝純化への道〟でもあったが、永田が容赦ないリンチができ、絶大な力をもち得たのも、背中に〝後光〟がさすほど、いわば〝清い〟生活ぶりがあったからではないか、とみる向きもある。

娘の無残な姿に対面する大槻節子の母・たいさん（10日）

第五章　崩壊へ

榛名―迦葉―妙義。かれらが、山岳アジトを変えていった順序である。もっとも、二つのアジトが同時に存在していた時期もあったらしいが、もっともあわただしい動きを示しているのが、二月六～八日の三日間であった。

二月六日　山本保子、頼良ちゃんを置去りにしたまま迦葉山アジトから脱走。一味は榛名山アジトを焼払う。

二月七日　中村愛子、頼良ちゃんを抱いて、迦葉山アジトから姿を消す。前沢虎義、榛名から迦葉山アジトへ行く途中、脱走。治安当局は、焼け落ちた榛名山アジトを発見。

二月八日　迦葉山アジトから妙義山穴ぐらアジトへ移動開始。

山本、中村、前沢とあいつぐ〝兵士〟の脱走に、一味の動きはにわかに激しくなった。七日、奥沢修一らは森の命令を受け、前橋市内へレンタカーを借りに行った。

だが、奥沢は浮浪者ふうの姿を怪しまれ、レンタカーの借用申込みを体よく断られた。森らは、奥沢のこの失敗を責めたが、山本順一の処刑、保子、前沢の脱走の結果、車を運転できるのは奥沢一人だっただけに「総括」はあきらめた。アジトに帰った奥沢は、最後のチャンスを与えられた――「東京へ行って借りてこい」。

同じ七日、つまり、保子の脱走の翌日、中村が頼良ちゃんを抱いて、迦葉山アジトから雪の山道へ脱出したのは、午前六時とも七時ともいわれている。

国鉄渋川駅からタクシーで榛名湖畔へ。冬の榛名に赤ん坊を連れた女――不審に思ったタクシーの運転手は、湖畔の高崎署派出所に車を横付けにしたが、警察官がいなかったため、近くの食堂に〝母子〟を連れていった。食堂の経営者Sさんは、

「ハンドバッグから哺乳ビンを出し、ミルクを飲ませていた。あまり疲れきった姿だし、赤ん坊が小さすぎるので、自殺しにきたのかと思った」

と語った。中村が高崎署員に〝保護〟されたのは、それから間もなくのことだった。

頼良ちゃんは無事　中村は警察に出頭

しかし、身元引受人があったので、中村は〝釈放〟されたが、高崎駅前で、足どりは跡切れた。だが、十二日夜、頼良ちゃんは、千葉県・市川署に保護され、中村は、その夜十一時半ごろ、警視庁に一人で出頭した。

一方、この間、三人の脱走者を出した残党グループは、奥沢らが東京・池袋のレンタカー会社から借りた小型トラックに〝所帯道具〟を積んで、最後のアジトである妙義山の穴ぐらへあわただしく移動しはじめた。

このとき穴ぐらに持込まれたものは、群馬県警の調べでは、「鴨焼肉カン詰五十五、押麦四十三㌔、テンプラ油十㌔、しょうゆ十八㍑、注射カプセル六十、ラジオ三、散髪用ハサミ二、乾電池百二十五、ノコギリ八、育児用ビタミン剤のほか毛沢東選集、中国語辞典、育児書」

など、四千点にものぼった。

かれらは、このあわただしい動きのなかで、いったい何をねらっていたのか。一説によると、二月十七日の「真岡銃砲事件一周年記念蜂起」の日が刻々と迫っていたからだ、ともいう。青砥幹夫らは十二日までの取調べに対し、

「北関東または長野県下の警察を襲い、ピストルを奪取する計画をたてていた」

と、自供している。穴ぐらアジトで、この計画の実行をめぐってどんな動きがあったのか解明されていないが、二月十二日になって中央委員の山田孝が最後の「総括」をうけた。

「総括」の理由は、森らの自供によると、

「理屈ばかりいって、実践の態度がない」

ということだった。山田の理論が武闘一本ヤリの森らをやりこめ、森らがその腹いせに山田を「総括」にかけたのか、これから解明されなければならない重要なポイントである。

山田は死の直前、〝死水〟がわりに雪を食った。それをみた永田は、ヒステリックな声で叫んだ。

――「最後まで食い意地がはっている」。

しかし、こうした〝内々ゲバ〟のなかで、捜査当局の手がひそかに伸びていた。くさい体臭、ライトバンをぬかるみにとられた奥沢の失敗、中村愛子の不審な行動……これらの点と線がつなぎ合わされていた。真岡事件一周年の二月十七日、皮肉にも一味にとって破局の日を迎えた。森、永田が逮捕され、穴ぐらアジトが摘発された。坂口弘を主謀とする五人が、あの浅間山荘にたてこもったのは、それから二日後のことである。

ここにも伊奈製陶が活躍する――

三面鏡のついたマーベリイナ。最高の機能を備えて新登場です。

今、いちばん新しい洗面化粧台です。白と紺でシャープにまとめた新製品。洗面化粧台はもちろん洗面用具を置くのに便利な棚、美しい三面鏡など、家具としての使いやすさ、風格もじゅうぶんです。特にボックスに組込んだ時計は大好評！

●業界のトップ●

ina マーベリイナ

伊奈製陶株式会社

本社　愛知県常滑市 〒479

エピローグ

火葬場の煙

私の分析

言葉の感覚に頼った自己拡大

作家　松本清張

八つの遺体が掘出された〝連合赤軍の墓場〟榛名の山すそは、いま梅が真盛りである。

ここで最初に発掘された山崎順の遺体は、十一日、白木の箱に入れられ、〝共同墓地〟から車で二十分ほどの榛名倉淵火葬場に、警察の警備車で運ばれた。火葬場は、死体を焼く煙が一つの、みすぼらしい建物。山から吹きつける風に、寒々と鳴っていた。

白木の箱のそばには白い花が一束。警察官がたてた線香の香りが、室内に強くたちこめていた。

夕方五時過ぎ、父親の山崎正さんと、高崎署員三人だけに見とられ、火が入れられた。傷だらけの死体はビニールに包まれ、その上を毛布がおおっている。暗くなった火葬場で、父親一人に拾われた山崎の遺骨は山を降りた。遺族控室はがらんとして、寂しく電灯がついているだけだった。

背丈の低い煙突から一筋の煙が、静かに暗闇に消えていった。

山田殺害の現場検証に立会う奥沢（13日）

群馬県警本部が発表した森恒夫の「上申書」には、「われわれの闘いの中で死亡した十名の元同志達、われわれが死刑にせざるを得なかった二名の元同志の死」とあり、「死亡」と「死刑」とをはっきり区別している。

「死刑」の対象は、それが極刑に値する重大な犯罪を行なった場合で、はじめから殺す意志がある。「死亡」は、殺すほどの罪状はなかったが、その懲罰の執行中に死に到った、ということであろう。

もちろん裸体にして縛り、長い時間寒冷な戸外に放置すれば凍死することは予想される。その予想に立っての実行だから殺意はあるが、形態はいうところの未必の故意である。直接手を下して殺す「死刑」と、結果としての「死亡」を予想した懲罰との違いである。後者が「総括」とよばれている。

まだ全体の取調べが十分に終っていないので（正確には公判を見なければ分らないが）、これまでの新聞報道によると、「死刑」に処せられた二人は山崎順と寺岡恒一である。山崎は赤軍中央軍の活動家だが、山から「逃亡」の様子が見えたので「死刑」にされたらしい。一月中旬ごろとある。

寺岡の場合は、闘争方針の意見の食違いらしいとみられていたが、捕えられた杉崎ミサ子の自供によると、死刑の理由は中央委員の寺岡が連合赤軍の委員長の地位を狙ったからだという。これが「統制を乱した」という罪状になり、正座させている寺岡の左モモを、坂東がナイフを突立て十五分間そのままにし、次に坂口がそのナイフを抜いて寺岡の左腋に刺し、こんども抜かずに十五分間そのままにさせた。

森がそのナイフを抜きとって寺岡の心臓部を刺し、ひん死の状態になったところを永田洋子の命令で杉崎がアイスピックで寺岡の首のうしろを刺し、最後にヒモで首を絞めたという。

「死刑」といっても銃殺刑や絞首

刑のように一気に殺すのではなく、死亡の前に多数で手を加え、十分に苦しませた。同時に、手を出した者のすべてに共犯意識を植えつけ、それを組織の固めにしている。

これまでの通念だと「死刑」の対象は主にスパイ行為に向けられた。かれらが読んでいたと思われるアルベルト・バーヨの「ゲリラ戦教程」にも「われわれが彼（密告者）の正体を見破った以上、彼は最高会議の裁きを受けるであろう。そして何の容赦もなく、彼は死刑の宣告を受けるであろう」（世界革命運動情報16）とある。

寺岡の場合は権力奪取の野心家として処刑されたのだが、権力を握っている側にとっては、それが内部にとどまっているだけに、逃亡・脱落よりは、はるかに「悪質」であって、その種の野心家を「反革命分子」に結びつけることは、外国の歴史を見ても容易に分る。これはスパイと同質なのである。

新左翼とよばれるこの種のグループが、六〇年のブント以来分裂に分裂を重ねて、現在どのくらいの派に数えられるか、第三者には見当がつかない。その分裂も明確な理論闘争を経た結果ではなく、ひとりよがりな理屈から分裂したもので、なべて理論らしい理論をもたないというのが通説になっている。

これが以前の左翼運動とは違うところで、たとえば戦前では、ソ連革命家の理論や指導方針が「教程」となっていて、それなりの路線があり、秩序もあったのだが、現在の学生運動家には理論を歴史的に学びとることがない。それどころか、すべて従来の権威を否定するところから出発している。

体制を最も喜ばせたかれら

権威の否定はよいとしても、それにはそれに対応する理論がなければならないのだが、そういうものは持合わさない。先人や先輩の言葉をすべて「関係ない」の返答、「ナンセンス」の合唱で葬り去ってしまうと、「反スタ」（反スターリン）などの文字がヘルメットに現れる一派の出現にもなる。革命の成功者は、すべて既成の権力者になって見えるのであろう。カストロよりもボリビアで敗死（戦死にみえる）したチェ・ゲバラが尊敬されるのである。

体系的な理論を学びとろうとせずに（面倒臭いのかもしれない）、その「語録」から感覚に合う言葉を抜出す。たとえば「銃口からのみ革命が生れる」といったところで、この言葉ができたときの歴史的な条件を考えることはしない。すべてが感覚によって決定される。だから、現在刊行されている本からでも気に入った片言隻句があれば抜書きする。

北一輝の思想に共感をおぼえたり、三島由紀夫の行動に同感したりする。現在の日本に、たとえ銃をもって政治の中枢部に乱入したところで、それにつづく革命の条件があるかどうかという客観的分析は全く無視されている。

かれらが「感覚」的であるのは、その使用する用語が難解なことでもうなずけよう。一部の評論家は難解な文章で知られているが、その新造語はかれらの感覚に気に入るらしい。「総括」という単語をまったく新しい意味に（はじめはどうやらその意味をとり違えて使ったように思われるのだが）した点でも、やはり新造語であろう。「人民から学ばなければならない」革命家が、人民から最も縁遠い言語遊びに耽っているのである。

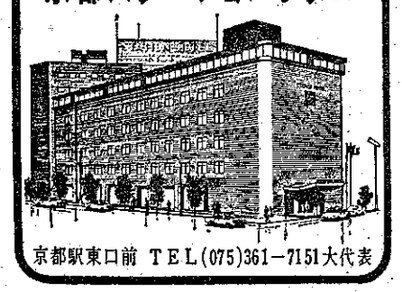
今度の事件で「総括」された「兵士」は、幹部以外の「兵隊」である。兵隊は幹部から「お前の態度は反革命的だ」という莫然とした理由の指摘で、集団リンチを受けている。旧軍隊では、下級兵は上級兵から「態度がふとい」（横着という意味）といって私的制裁をうけたものだが、これは具体的な指摘がないだけに反論ができない。上級兵の虫の居どころが悪く、つまり兵営の中に拘束された欲求不満が鬱積しているとき、そのはけ口として下級兵を制裁する際、この理由にもならない理由が使われた。

今回の山中の「兵営生活」のなかで行われた「軍律」の名による処分の心理にも共通性がある。それは「革命軍」の軍隊にも「天皇の」軍隊にも関係のない、閉鎖社会における人間の原始性である。今回のはそれがより動物的となっている。

かれらはいずれも中流以上の家庭に育ち、リーダーの森は二十七歳、幹部だった寺岡は二十四歳で、あとは二十二、三歳というのが多い。彼らは労働の経験も、闘士としての経験もまことに未熟である。

さらに、理論的な武装はほとんどない。「世界同時革命」というが、現実面の科学的分析がないから小児病的な（この語は戦前の左翼陣営にはやって、なつかしい）言葉の感覚だけに終っている。大学騒動のときラジカルな言動によって、あるていどノンポリの学生を動員できたという極めて狭い経験が、自己拡大されて自分らの前衛的な軍事行動が、大衆を革命に蜂起させ得るという幻想にもなっているようである。

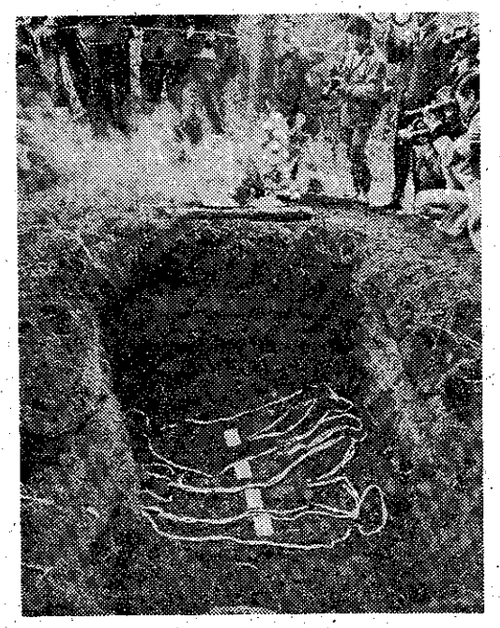
連合赤軍は、その集団殺人行為によって体制をもっとも喜ばした。歴史の教えるところによると、内部から最も狂熱的な言動を行なって、組織を壊滅させる権力との通謀者が必ずいるものである。連合赤軍のなかにその分子がいたかどうかは、もう少し先にならないと分らない。

新幹線より徒歩3分―設備は優雅
京都ステーションホテル

京都駅東口前　TEL(075)361－7151大代表

テロリズムの系譜と彼ら

どさ回りの大根役者が演じた「悪霊」劇

京都大学教授（政治思想史）
勝田吉太郎



小幅，尾崎，加藤，進藤らの共同墓場（12日）

榛名山中で繰りひろげられた連合赤軍内部の陰惨なリンチ事件は、前世紀ロシアの革命運動史上の有名なエピソードを想起させる。一八六九年十一月二十一日に起った事件が、それである。

当時バクーニンの弟子ネチャーエフは、学生イワノフを裏切者として裁き、配下の同志たちを彼の殺害に加担させ、そうすることによって、革命結社の結束を固めようとしたものである。この惨劇をモデルにして書かれたのが、ドストエフスキーの不朽の名作「悪霊」であった。

百年前に書かれたこの小説の世界は、気味悪いほどにリアルである。イデオロギーによって良心をマヒさせた狂信者たち――「悪霊」にとりつかれた人間たちの心理の深奥を鋭くえぐり出す文豪の筆は、なまじっかな事件記者のルポルタージュよりもずっとあざやかに、かつ深刻に現代における革命テロルの論理と心理構造とをあばいて見せてくれる。実際、今度の連合赤軍による一連のリンチ事件に接して、どさ回りの大根役者が演じる「悪霊」劇を見るような感にとらえられるのは、あながち私だけではあるまい。

ネチャーエフはあるまい。

革命的マキャベリズムの使徒であった。つまり「革命のためには、すべてが許される」と信じるのであるが、この定式は、ドストエフスキーの世界にあって、「もし神がなければ、すべてが許される」という命題のパリエーションである。つまり彼は、このリンチ事件を介してニヒリズムの革命理論の論理的帰結を徹底的に暴露しようとしたのだった。

ところで、ネチャーエフとバクーニンとの共同執筆になる「革命家のカテヒズム（教理問答書）」は、破壊と否定の暗い情熱を原理にまで高め、革命家に対して反道徳主義の指針を与えている。

たとえば、次の一節を見るがよい。「革命家は世論を軽蔑する。彼は今日の社会道徳を軽蔑し、憎悪する。彼にとって革命の勝利を助けるものはすべて道徳的であり……」、さらに「血縁、友情、愛情、感謝、名誉心のごとき柔和な感情は、ただ一つ革命事業の冷たい情熱によって押しつぶされねばならない……」。

革命の蜃気楼を追い続けて

弟が兄を殺し、妻が夫の処刑を放置し、友が友を密告するといった連合赤軍たちの行動様式を律しているのは、実に百年前に書かれたこのカテヒズムなのである。

ドストエフスキーはネチャーエフ（小説ではピョートル・ヴェルホヴェンスキー）の口を通してこういわせている。「プロレタリアがいないのは実に残念だ。だが、それも間もなく発生するだろう」。次いでネチャーエフは、ロシアにおける革命のにない手をこう列挙する。

「生徒たちと一緒に神を笑う教師、貧困の故に殺人を犯さざるをえなかった、として犯人をかばう弁護士、自分の自由主義がまだ不十分でないかと法廷でびくびくしている裁判官、その他官吏や文士など味方はたくさんある」と。

つまりネチャーエフは、こうした言葉で、まだ資本主義の未発達な、従って革命軍の一般兵士――プロレタリアが少数にとどまる後進国で、社会革命が急進的知識人の手によって代行される事情を示唆している。これらの革命的知識人ないし同伴者たちの多くは、未来に迫る社会革命を予見して、即刻自分の進歩性を立証しようと心をくだき、何らかの形で政治的ないし道徳的アリバイを作っておこうと努める連中なのである。

バクーニンやネチャーエフが革命の舞台から姿を消してから一世紀近くたった。今日のわが国の「客観的条件」は、むろん百年前のロシアとも、現今の低開発国とも全く異っている。だが、それにもかかわらず、奇妙なことに舞台はぐるりと一回転して、いまや同じような道具だてで革命劇が上演されつつある。

つまり、わが国のような高度工業国では、待望のプロレタリアが大量に出現しはしたものの、皮肉にも彼らは、おしなべてテレビの前で眠りこけているのである。もはや先進諸国のプロレタリアは「鉄鎖以外に失うべき何ものをも持たない存在」ではない。

そこで再びバクーニンの教説が、マルクーゼ、ルフェーブルといった「新左翼」の群小理論家たちの口を通じて唱えられるようになっている。いわく、革命的インテリゲンチア、学生、抑圧された少数民族、ルンペン・プロレタリアたちこそが、革命の起爆剤の役割を果さねばならない、と。こうして今では、過激な学生運動は後進国のお家芸ではなくなっているのである。

現代革命の先兵にまつり上げられたこれらの連中は、「周辺的人間」と呼ばれている。彼らは、かつてマルクスがプロレタリアートに与えた特徴――「市民社会の階級ではあって、しかも市民社会の階級ではない」存在なのである。

ところで「周辺的人間」という規定は、いみじくも、彼らが本質的に社会的生産の場から切離された存在であることを物語っている。むろん学生もアルバイトはしよう。しかしアルバイトは、しょせんアルバイトでしかない。社会的生産の場を持たないからこそ、彼らは自由の身であり、無責任にもなり得る。つまり身が軽いのである。

そうした社会的存在であるからこそ、現代革命の先兵たちは革命成就のための客観的条件を安易に無視し、火炎ビンや手製爆弾を投げ、自分自身は悲壮感に酔いながら、その実、はた迷惑な革命ごっこにうち興じることもできるわけである。

他方、正統マルクス主義の見地からすれば、革命成就の客観的条件が十分に熟した時、最後の時点で暴力が必要になる。それはちょうど、熟しきった柿がサオの一突きでポタリと落ちてくるような具合である。その意味でエンゲルスは、暴力をもって「革命の助産婦」とみなしたものであった。

しかし「革命の起爆剤」たろうとするテロリストたちの目に、こうした正統マルクス主義の革命観や暴力観は、日和見主義と映じよう。彼らは、知ってか知らでか、バクーニンの処方箋に従って、濃厚に主意主義的な革命戦術をとり、破壊こそが「創造的情熱」と盲信し、革命は起さねばならないと考える。

その結果、現代の高度工業文明諸国に、いたるところで小型バクーニンやネチャーエフたちがたち現れ、低開発諸国の革命英雄――ゲバラや毛沢東を理想化し、ドン・キホーテさながら革命の蜃気楼を追い求めている。

自閉症的エネルギーが内攻

それにしても、ここ数年来続発している革命セクトの離合集散やセクト間の凄惨な内ゲバ、そしてついに日の目をみたセクト内部のむごたらしいリンチは、一体どう理解したらよいのか。

元来セクト（党派）とは、社会に通用する生活規範から絶縁して、特殊な価値や行動基準を厳守しようとするグループである。宗教の世界では教会が罪人と聖人とをともに幅広く信徒としてつつみこむのに反し、セクト（宗派）は無垢な聖者だけからなる共同体である。政治の世界では、有權者を広く抱込もうとする政党に対してセクトは特別の有資格者のみからなる組織である。

従ってセクトは、①排他的な狭いサークルといった性格を宿命的に帯びる一方、②特別の有資格者しか接することのできない門外不出の教典を護持するといった一種の秘教意識（ドグマティズム）、および独善的なエリート意識のとりこになっている。この点では宗教のセクトも革命政治のセクトも変りはない。

セクトはまた、③堕落した世界に住う外なる俗衆を教化し、解放しようというはげしい救済主義の使命感に燃えたっている。

さらに、④出現したばかりのセクトに見られるのは熱烈な同志愛、戦友愛の横溢であり、全身全霊をあげて大義に殉じようという闘士たちの兄弟的結合である。そこには一種の集団的エクスタシーがあり、しばしば性的乱交の誓の祭典が見られもしよう。

同時にセクトの狭いサークルにしか通用しない特殊なコトバ、隠語も生れる（「総括」も、その一例）。実際各セクトの出すパンフを見るがよい。われわれのような外なる俗衆には理解不可能な用語や概念にみちみちている。

しかし、⑤自己陶酔と和合の期間は長く続かない。なぜといって、外部の世界を変革し、俗衆を救済しようという伝道活動が社会のひややかな拒絶にあって挫折すると、セクトは自己の内部にひきこもり、追いつめられて冷たい世間から身を守る逃避場へ転化していく。榛名山中のアジトがそれだ。そこにいたって彼らの攻撃的エネルギーは屈折して自閉症的に内攻し、やり場のない憤懣がドロドロと内部にうっせきする。

その果てに現れるのは、⑥一種の絶対禁欲性ノイローゼ症状であり、他面ではドグマの純粋性を死守しようとする異常な関心が発展する。その過程で血みどろの正統派争いと内ゲバが演じられ、セクトは果てもなく核分裂する。

⑦今では集団的エクスタシーは雲散霧消し、それに代って相互の疑心暗鬼と憎悪の修羅場がたち現れる。脱落者や異端者や裏切者へのリンチが、セクトの末期症状を告げる特徴となる。

「下界」を遠くはなれた山中の暗く閉じられたアジトのなかで繰りひろげられた連合赤軍の行状記は、革命の社会学に格好の教材を提供するに違いない。

この事件の病理的考察

女性的犯罪の結末

東京医科歯科大学助教授（精神医学）
宮本忠雄

行方，連山，寺岡の3遺体が山を下って，発掘は終った

今回の連合赤軍のリンチ殺人事件については、その社会的背景や革命理論からみていくことも大事だが、個人病理の立場から跡づけていくことも必要だろう。

この場合、問題となるのはむろん森恒夫と永田洋子の二人で、だれでも今度のような凄惨な大量殺人を知れば、この二人は残忍冷酷な「強い性格」の人間だろうと想像する。ところが、永田はなんといっても女の身だし、森はもともと小心で気の「弱い性格」だったと伝えられていて、矛盾しているようにも見える。

しかし、強い性格の人間でも内面にどこか弱い部分をそなえているのがふつうで、その典型が森や永田のような偏執質の人間である。彼らは不屈の狂信的な精神をもち、他人をとことんまで攻撃する戦闘的な性格の持主だが、心の底には自信のない神経質なところがあって、そこが刺激されると、ひどく興奮し、外面の狂信性や攻撃性が代償的に強まってくる。

パラノイアに近い心理状態

一九一三年、ドイツにワーグナーという教頭がいて、性格的にも敏感で疑いぶかい面と自己中心的で傲慢な面を共有していたが、あるとき猥褻を行なって、これが村人に知れるのではないかという不安から狂暴な破壊衝動がおこり、ついに妻子をふくめて十四人を鉄砲で殺すという事件があり、日本でも心理的にはこれとまったく同じ津山事件という二十八人殺しが昭和十三年にあった。

森がワーグナーや津山事件の都井睦雄のような、パラノイア（偏執症）だというのは言いすぎにしても、それに近い心理状態にあったとは考えられる。ワーグナーは凶行のあとで自分が救世主であるという誇大盲想を抱いたが、森も自分が全能者だという幻想を抱いていたのであろう。

パラノイアはふつう性格―環境―体験という三者の複合から形成されるが、森の場合にも既述の偏執的性格、山岳での孤絶の環境、同志の脱落や逃亡といった体験などが条件となって、異常性を強めていったと想像される。

永田にも同様の心的メカニズムが作用していたと思われるが、そのうえ彼女にはバセドウ氏病という厄介なものが付け加わった。バセドウ氏病の場合には一般に感情が不安定になり、興奮性や衝動性が高まり、不安・嫉妬・憎悪・怨恨などの情動が刺激されやすくなる。こういう状態の彼女には人民裁判の検事役はたぶんうってつけのものだったろう。

このような森と永田の異常な心理が、同様な環境下の仲間たちに感応（感染）していったであろうことは容易に想像される。それにしても、今度の事件はいってみれば「弱者の犯罪」であり、女性的犯罪である。屈服した相手を詐してこちらに従えるのが男の論理であるが、女の論理は弱い相手をどこまでも追いつめて、許すことをしない。由来、女性犯罪には放火とならんで殺人が意外に多いのも、この理由からである。

朝 つい手が出る
好みのシャツが、今日の
あなたを表わします。
色が新鮮だから
気持も新鮮です。
ブルー、ゴールド、ピンク
など 色とりどり。
自分の好みで
選んでください。
目が覚めるシャツ。蝶矢シャツ
CHOYA
この製品はアキレステレホンを使用しています
Printed in Japan 一出版印刷株式会社印刷